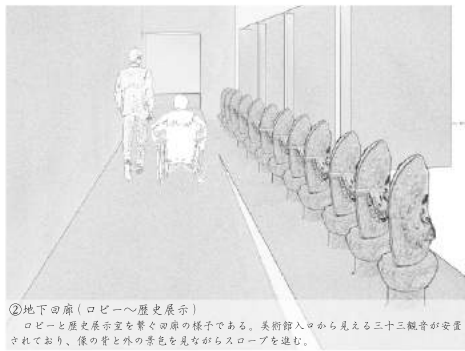
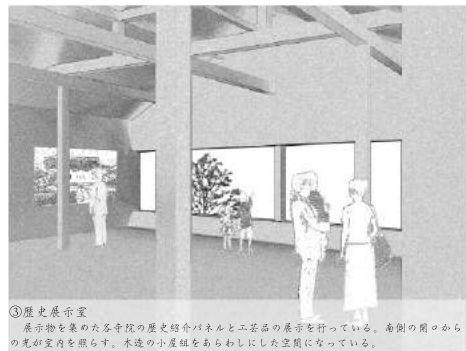


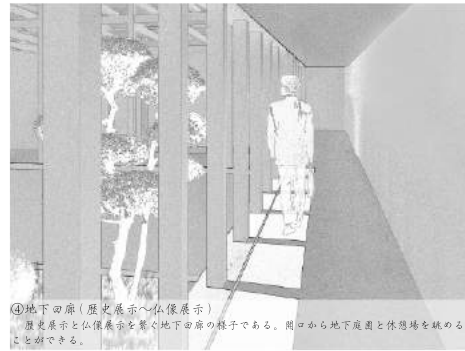
①美術館入口
敷地の南側道路に面した美術館入口の様子である。入口前には庇軒があり、奥に見えるスロープの開口から三十三観音がお出迎えしてくれる。



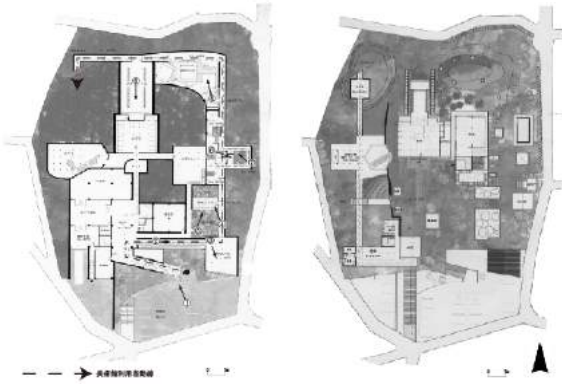
②地下回廊(ロビー～歴史展示)
ロビーと歴史展示室を繋ぐ回廊の様子である。美術館入口から見える三十三観音が安置されており、像の背と外の景色を見ながらスロープを進む。



③歴史展示室
展示物を集めた大谷寺院の歴史紹介パネルと工芸品の展示を行っている。南側の開口からの光が室内を照らす。木造の小屋根をあらわにした空間になっている。

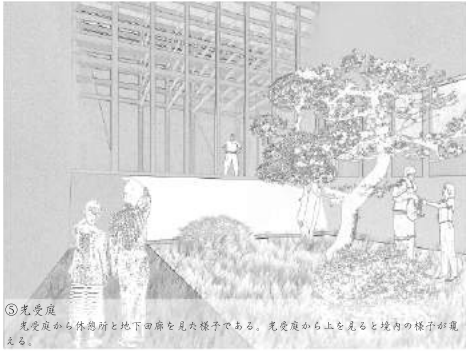


④地下回廊(歴史展示～仏像展示)
歴史展示と仏像展示を繋ぐ地下回廊の様子である。開口から地下庭園と休憩場を眺めることができる。

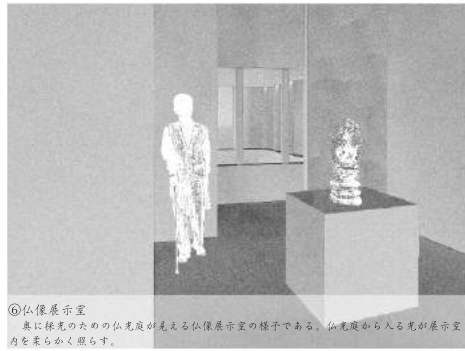


生きられる寺院空間の公共性に関する研究

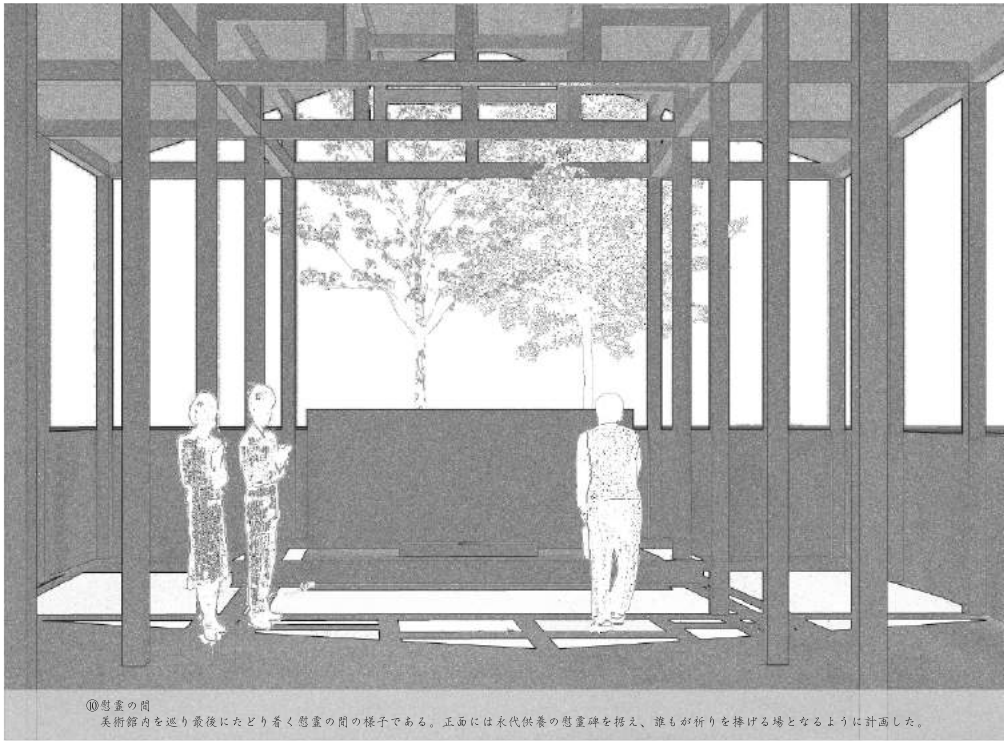
-無住寺の記憶を継承する祈りの寺宝美術館-



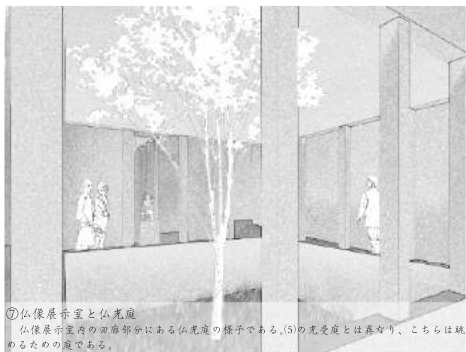
⑤光受庭
光受庭から休憩所と地下回廊を見える様子である。光受庭から山を見るを境内の様子が窺える。



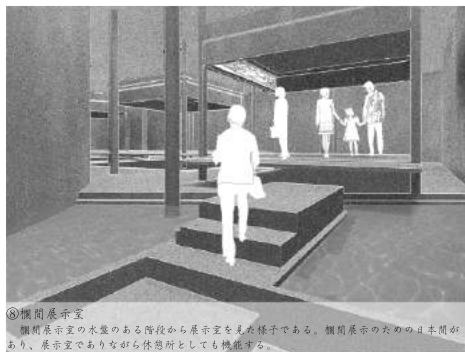
⑥仏像展示室
奥に採光のための仏光庭が見える仏像展示室の様子である。仏光庭から入る光が展示室内を柔らかく照らす。



⑩経巻の間
美術館内を巡り最後にたどり着く経巻の間の様子である。正面には永代供養の経巻碑を据え、誰もが祈りを捧げる場となるように計画した。



⑦仏像展示室と仏光庭
仏像展示室内の回廊部分にある仏光庭の様子である。Sの光受庭とは異なり、こちらは眺めるための庭である。



⑧欄間展示室
欄間展示室の木造のある階段から展示室を見える様子である。欄間展示のための日本間があり、展示室でありながら休憩所としても機能する。



⑨経巻図展示室
最奥には集約した涅槃園の中で最も大きい乾陀院の八相涅槃園が配置され、入口から入ると正面はその姿を見ることが出来る。



⑪山門から境内へ
美術館内を巡り、涅槃園の間で祈りを捧げ、改め境内へと入ると、正面には本堂が建っていると正面にその姿を見ることが出来る。山門をくぐって最初に見えるこの華観は現況と変わらぬように配慮をした。

1. 研究の背景

現在、日本には仏教寺院が75,800寺以上あるが、そのうち15,000寺は住職のいない「無住寺」であるという報告があり、年々その数は増えている。江戸期における寺院は、寺子屋や相談所など、様々な形で地域に活用されてきた。しかし現在の寺院は、葬式等の特別な時でない限り地域住民との接点はなく、地域における寺院の役割は薄れてきている。日本に現存する寺院施設の多くは、古来よりその土地において継承されてきた日本の歴史と文化を少なからず体現した重要な財産であると考えられ、それらの維持管理が不十分であるのが現状である。維持管理が不十分でない為にかかる本草等の仏像の盗難は1つの社会問題となる程である。

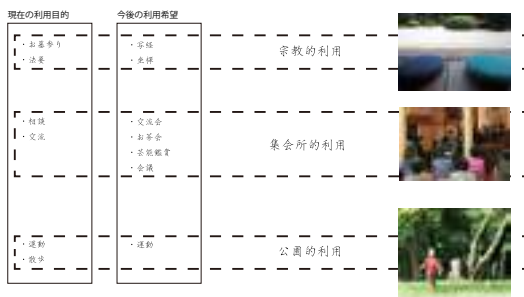
しかし近年、寺院との関わりが希薄化している現状を踏まえて、既存施設の新たな活用方法や地域活用の提案を行うことで寺院の今日的役割を模索する動きが見られる。これらの施策は無住寺の増加問題に歯止めをかける上で重要な手がかりになると考えた。



5. 「利用実態」と「希望」の分析

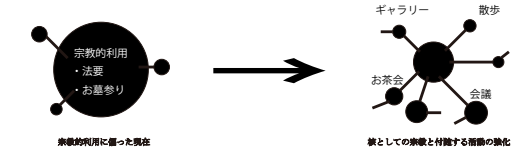
利用実態と希望を整理し、利用方法の分類を行った。

利用方法の分類



核としての宗教と付随する活動

調査結果から、現在はお墓参りや法要などの宗教的な利用方法に偏っていることがわかった。また、今後の利用方法としては、坐禅や読経などの宗教に対する理解を深める活動とともに交流会や茶室鑑賞などマチの集会所的な利用方法に対する期待が高まっているようである。



8. 敷地

計画地：玉潤院敷地（曹洞宗寺院）
所在地：愛知県知多郡東浦町石浜

敷地面積：4232.47 m²

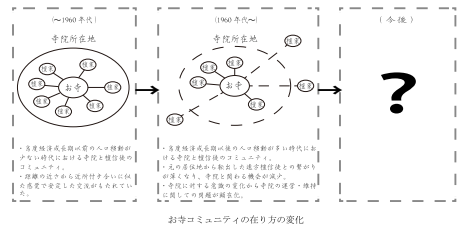
既存床面積
本堂：128.79 m²
關山堂：59.50 m²
庫裏：214.21 m²
書院：103.57 m²
土蔵：25.35 m²

既存延床面積
531.42 m²



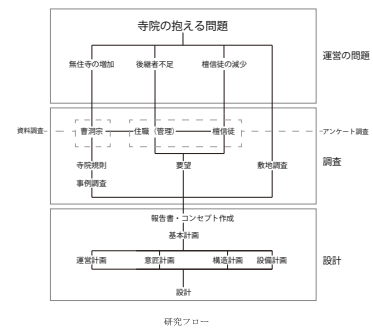
2. 研究の目的

これまで、仏教寺院における建築様式の変遷や、空間性、地域との関わりについては数多く研究されている。しかし、「義務寺及び無住寺」の増加問題に端を発した寺院側の取り組みや、建築分野による寺院の活用方法について研究したものはない。そこで本研究では、寺院の活用方法の変化と曹洞宗寺院の規範にあたる「曹洞宗宗制」の分析を通して、寺院の地域活用への取り組みについての現状の把握と課題の抽出を行い、「生きられる寺院空間」をテーマに実在の義務寺及び無住寺を対象としたケーススタディにより今後の寺院の在り方を提案することを目的とする。



3. 研究方法

曹洞宗寺院に対するヒアリング調査及び信徒に対する寺院の利用方法についてのアンケート調査を実施し、今後の寺院に求められる施設、集会所などについてリサーチをかける。その上で、「曹洞宗宗制」の内容と照らし合わせ、設計提案を行う。

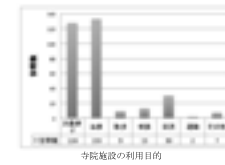


4. 「利用実態」と「希望」の調査

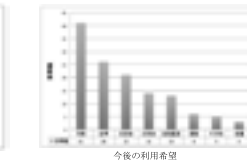
玉潤院（愛知県）の信徒に対し、現在の寺院の利用実態と今後の希望調査をアンケート形式で実施した。

調査基本データ	質問項目	具体的な希望
調査方法：アンケート調査 (各相家へハガキによるアンケートを郵送、回答後は返送にて回収) 調査対象：玉潤院檀家全 280 世帯（各相家の世帯主を対象） 配布数 280 回収数 139 回収率 49.6%	・施設の利用目的について ・利用頻度について ・本堂等や境内の今後の利用方法について	・講堂 ・仏具の展示 ・宗門館で展示したい ・地域の作品や展示を収めながらお盆会 ・住職の講話・読経等の機会による交流 ・茶室を設けたい、キョウワラ（日本酒、俵の、煎茶など） ・能、舞などの伝統芸能 ・定期的に座談会を開催したい ・高層が欲しい、踊りなど ・宗門館やお盆会として会場の確保があること ・音楽、鑑賞 ・宗門館を使用して展示など ・展示を目的とした「美術館」 ・お盆会を出して頂くお盆の会と写経の会を週一、月一くらいで ・お盆会など、毎月開催してほしい ・仏教の基本思想についての講演

a. 利用実態の調査結果

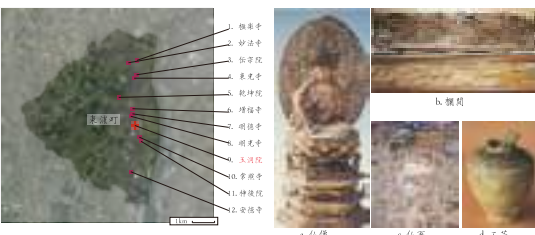


b. 今後の利用希望の調査結果



6. 寺宝の調査

寺宝保護の観点から敷地周辺寺院の寺宝調査を行った。敷地である玉潤院周辺の寺院12カ所に仏像、仏画、工芸品、欄間など計33点があることがわかった。今後、これらの寺院が無住寺になったと仮定して各寺院の寺宝を展示物として集約する。

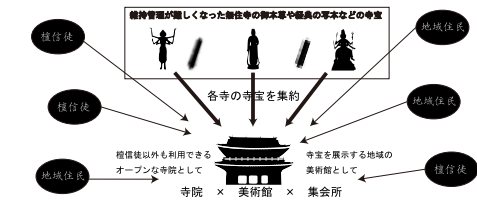


寺宝一覧

寺名 [東浦町玉潤院]	仏像	仏画	工芸
<ul style="list-style-type: none"> 阿弥陀如来像 (坐禅型) 高さ33cm 横幅29.3cm 阿弥陀如来像 (坐禅型) 高さ26cm 横幅22.2cm 阿弥陀如来像 (坐禅型) 高さ40cm 横幅32.2cm 阿弥陀如来像 (坐禅型) 高さ41cm 横幅12.6cm 阿弥陀如来像 (坐禅型) 高さ13cm 横幅17.5cm 阿弥陀如来像 (坐禅型) 高さ44cm 横幅42cm 阿弥陀如来像 (坐禅型) 高さ39cm 横幅12cm 大徳智徳如来像 (坐禅型) 高さ54.5cm 横幅30cm 文殊菩薩如来像 (坐禅型) 高さ92cm 横幅31cm 如意輪観世音菩薩如来像 (坐禅型) 高さ20cm 横幅16.2cm 十一面観世音菩薩如来像 (坐禅型) 高さ48cm 横幅14.7cm 地藏菩薩如来像 (坐禅型) 高さ76cm 横幅29cm 寺宝地蔵菩薩如来像 (坐禅型) 高さ40cm 横幅32.2cm 	<ul style="list-style-type: none"> 阿弥陀如来像 縦167cm 横102.5cm 文殊菩薩如来像 縦160cm 横100cm 阿弥陀如来像 縦143cm 横79cm 阿弥陀如来像 縦200cm 横162cm 阿弥陀如来像 縦280cm 横246.8cm 玉潤院八相涅槃像 縦187cm 横152cm 安徳寺八相涅槃像 縦194cm 横176cm 阿弥陀如来像 (坐禅型) 縦110cm 横39cm 文殊菩薩如来像 (坐禅型) 縦150cm 横93.5cm 達磨大師像 (坐禅型) 縦127cm 横54.9cm 地蔵菩薩如来像 (坐禅型) 縦60cm 横27.2cm 観世音菩薩如来像 (坐禅型) 縦86.5cm 横53.6cm 	<ul style="list-style-type: none"> 三尊像 (妙法寺) 高さ26.8cm 横幅20.8cm 坐禅 (坐禅型) 高さ49.4cm 横幅30.6cm 獅子 (坐禅型) 高さ30.2cm 横幅37.8cm 石浜三尊像持送迎像 (玉潤院) 高さ80cm 横幅60cm 	

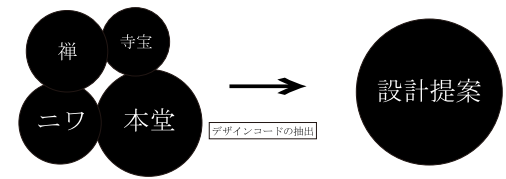
出典：発行愛知県東浦町「新編 東浦町誌 資料編 教育・民俗・文化」平成13年p613-634,p661-663

7. 無住持の記憶を継承する祈りの寺宝美術館

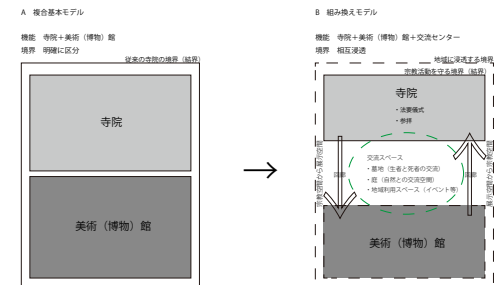


今後の無住寺増加を見据え、数カ寺の統合と寺宝の保管を目的とした「寺宝美術館」の設計を行う。
仏像や歴史資料などの管理及び展示を行い一般に広く開放するとともに、調査で得られたお寺に対する希望を元に、宗教活動を核として捉えつつも「マチ」の集会所や公園としての機能を付与した「マチ」に対してオープンな寺院のモデルを考える。提案にあたり、次に示す3つの考え方を軸に設計を行う。

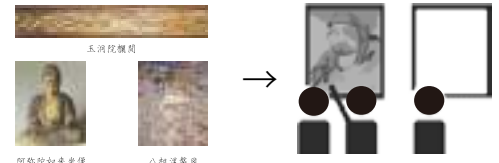
- 宗教の「思想」と「境内の記憶」から構成要素を抽出すること。
- 宗教が伝えるべき「思想」と既存の境内から継承すべき要素を抽出し、設計提案として形にする。



- 宗教活動を核とした上で美術館や集会所、公園としての機能を付与すること。
- 宗教活動を守る本堂、庫裏を維持しつつ寺宝を守る美術館、地域の人々の集まる集会所と公園を併設し、それらを回廊で繋ぐことで、信徒の利用だけでなく地域住民に対してオープンな寺院を目指す。



- 展示物からデザイン要素を抽出し展示空間及び展示方法を検討すること。
- 展示物は周辺の寺院から集めたい寺宝であり、これらの展示物から展示空間を検討する。

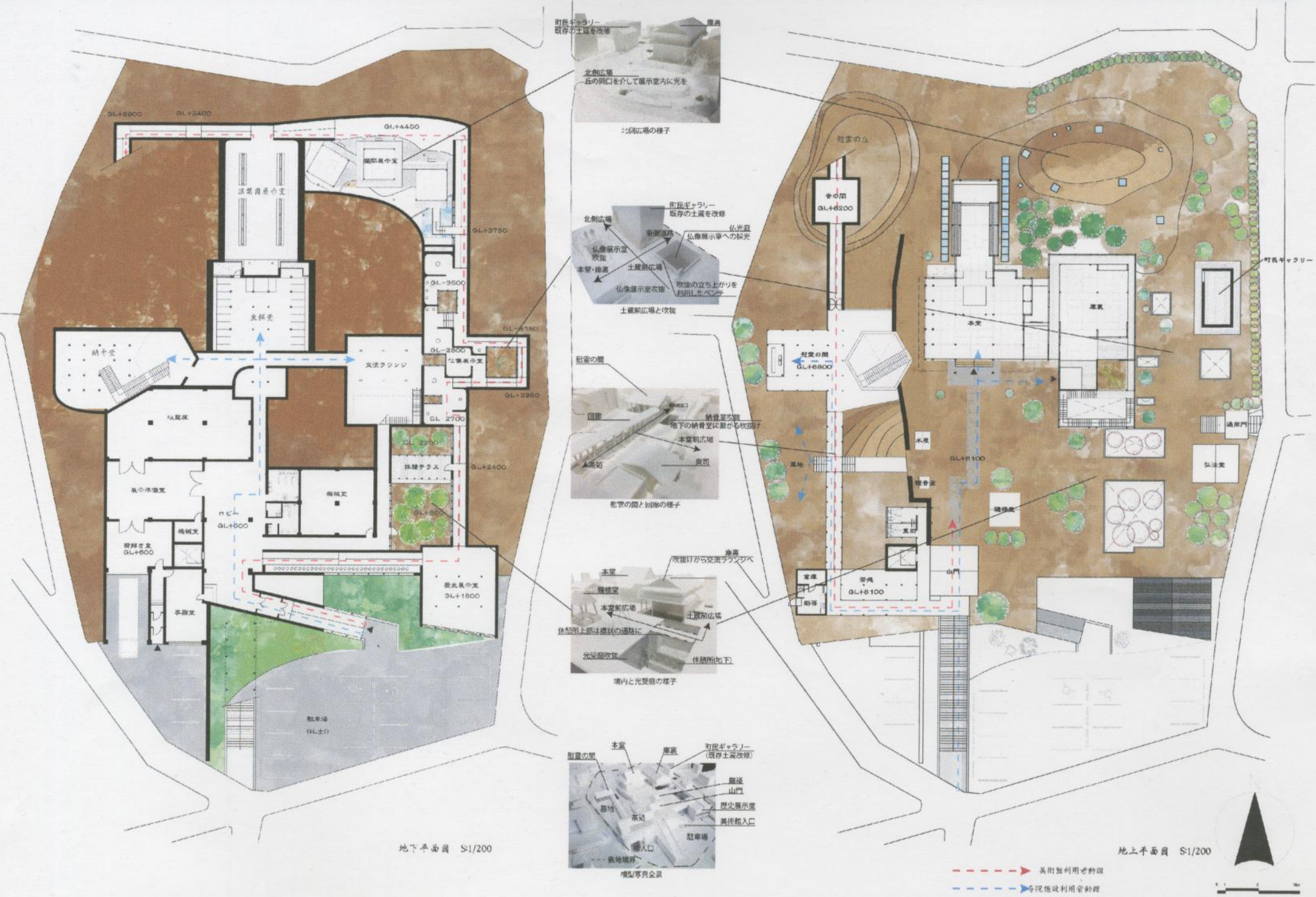


【敷地の地形について】

敷地周りの道路は北に向かって急な坂になっており、境内のレベルは南面道路のレベルから8100mm高い位置にある。そのため、山門から南面に対しては開けた眺望が確保されている。その一方で、東面道路側にはマキの生垣があり、敷地内の様子が窺いづらくなっている。

【既存建築物について】

既存の建築物として本堂、庫裏、鐘樓堂、書院、土蔵、山門などがある。宗教活動を支える場所としての本堂、庫裏の機能と庭の雰囲気は維持しつつ、展示空間と集会所的な利用ができる空間を新たに併設し、地域に対してオープンな寺院として提案を行う。



地下平面図 S1/200

地上平面図 S1/200

- - - - - ▶ 美術館利用者動線
- - - - - ▶ 寺院施設利用者の動線



10. 断面計画

